
二人の短編集

でんでん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人の短編集

【Nコード】

N7302Y

【作者名】

でんでん

【あらすじ】

コ哀、新志の短編集。

昼休み（前書き）

ギターーーーー短編集（＞＜＊）ノ～～～～
とまあ調子に乗っているAsuです。

昼休み

ある昼休みのコトだった。哀は歩美と喋っていると、隣のクラスの
No. 1にもてる有川優に呼び出された。

優「あの、灰原さん。僕と付き合ってもらえませんか？」

哀「いや。」

哀は失礼ながら、速攻で告白を断った。当たり前だ、自分には江戸川君がいる。小さくなった頃からもう、5年がたった。その間、ずっと想ってきたのだ。

哀「それじゃ。」

そのまま、灰原は去っていった。

あの後、少年探偵団のグループで帰っていた。哀はコナンの横顔をジーーーーーっと見つめていた。そして小さくため息ついた。

哀「素直になれたらね。」

この気持ち(前書き)

コナン目線です(＞＜＊)
ノ
～
～
～
～

この気持ち

コナン「なあ、灰原あ。」

哀「いや。」

コナン「何も言ってねえし。」

哀「どうせ、昼飯作ってー。とでも言うんでしょ。」

コナン「…正解。」

ある日の昼下がり。灰原はいつもの様に何でも俺の事を見透かしてくる。

しばらく俺が見つめていると、灰原はため息をつきながら立ち上がった。

やっぱり灰原は優しい。いつからだっけ、こんな灰原を好きになったのは。守りたくなったのは。

初めて泣かれた時にあった気持ちがそのまま大きくなって今に至る。気づいたのは、組織を倒して解毒剤が出来た時だった。

コナン「なあ、灰原あ。」

哀「何？私今忙しいんだけど。」

コナン「…なんでもない。」

この気持ちが伝えられたら。どんなに楽か。
少し勇気を振り絞って、伝えてみっかな。

今度。

彼女の瞳（二）（前書き）

何か前後編になりました（ $T \wedge T$ ）
すみません（ノ―・，）

彼女の瞳（二）

組織を倒して解毒剤を飲み、俺は工藤新一に戻った。灰原も宮野志保に戻って、味わったことのない高校生活を楽しんで（？）いる。

解毒剤を飲んだ後に蘭に告白した。俺がコナンだったってことも話した。

その事を宮野に話すと、「よかったわね。」と言ってくれた。しかしその日からだった。宮野がどこもなく悲しそうな瞳をし始めたのは。

蘭「ねえねえ新一！！！！今度トロピカルランド行こうよ♪」

新一「ああ。」

俺が蘭と話しているとまただ。またアイツが悲しそうな瞳をしている。

そんなアイツを見てると胸が苦しくなる。俺には、蘭がいるのに：どうかしてる。宮野の事が気になるなんて。

新一「なあ、宮野。」

志保「何よ。」

新一「おめえ何でそんなに悲しそうな目えしてんだ？」

志保「貴方には関係ないわ。」

喋りかけても、ほら。悲しそうな瞳をしている。そんな悲しそうな瞳すんなよ。

あの目をしている宮野を見ると、何か守りたくなる。蘭には抱か

ない感情が沸き上がってくる。

ああ。何でか分かったかも。俺、宮野の事が好きなんだ。

彼女の瞳（二）（前書き）

続きます／（＜＿＞）／

彼女の瞳（二）

俺が宮野を好きと気づいた日から、二日後、俺は蘭を呼び出した。

蘭「新一…？話って？」

新一「蘭、別れてくれ。」

蘭「！」

新一「他に守りたいやつが出来たんだ。いきなり、悪りい。」

蘭「新一…。その人、志保さんでしょ？分かるよ、なんとなく。」

新一「ああ。」

蘭「仕方ないね…。新一が志保さんを好きなら。」

蘭はやっぱり優しい。俺のこと、ちゃんと分かってくれてる。

蘭「志保さんの所、いかないでいいの？」

新一「ありがとう、蘭。」

それだけ言って、俺は走り出した。宮野のもとへと。

走って走って走って走って走って走って走って走って宮野を見つけた。彼女を見るだけで、胸がきゅんきゅんする。俺はどっかの少女漫画のヒロインか？

新一「宮野!!!」

志保「何よ。うるさいわね。」

新一「俺、宮野の事が好きだ!!!!」

言った。すげえ勇気が必要だったけど。

志保「蘭さんは？」

新
一
「ふつた。」

志保「はあ？」

新一「俺はおめえが好きだ。」

志保「私はそうじゃなきゃ困るけどね？」

新
一
「はあ？」

志保「あたし、貴方のこと、灰原哀の頃から好きだったもの。」

今……何て言った………???

み、宮野が俺のこと、好きって?? 顔が熱い。きつと俺、今顔真っ赤だ。

真っ赤な顔のまま、俺は宮野を抱きしめた。

彼女の瞳（二）（後書き）

何か…ビミョー。

駄文で、すみません（ノ・、）

サヨナラ（前書き）

何かアカン。っていうか雛花さんのと何か似てます。すみません（
ノ・'・'）
パクった訳じゃないんです（泣）

サヨナラ

暗い部屋の中で涙を流している青年と静かに笑っている女性がいた。そして青年の手の中には銃———。

矛先は女性のこめかみだった。

いつもの様に博士の家でくつろいでいた新一は志保に甘えていた。

新一「志保お。」

志保「そういえば貴方、今日どうするの？嫌って言うても止まって行くんでしょうけど。」

新一「当たり前。」

志保「じゃあ、着替えとって来ておきなさい。」

新一「めんどい…。」

志保「別にいいのよ？私のとびっきり女の子らしい服を貴方に着させても。」

新一「いってまいります。」

新一は即座に立ち上がって着替えを取りに行った。

新一が自分の部屋に来ると、人の気配を感じて後ろを振り返る。そこには蘭がいた。

新一「おう。蘭どうした？」

実は新一は先日蘭を振ったばかりでそれ以来喋っていなかった。

蘭「新一に復讐しにきたの。と言っても新一を殺す訳じゃないよ？
新一の最愛の人を殺しに行くの。」

蘭は淡々と話していった。これが幼なじみだった蘭…？新一には信じられなかった。

新一「蘭…？」

蘭「でもそれじゃあつまんないよね？だから新一、志保さんを殺してきて。」

新一「無理だ。」

蘭「可哀想に。子どもたちと博士の命を無駄にするんだ？」

新一「…！」

蘭「はい、拳銃。子どもたちと博士、守ってあげなよ…？」

そのまま蘭は出ていった。俺は脱力していた。志保を殺せだど？無理だ。しかし子どもたちと博士も見過ごせない。やっぱり志保を殺さなければならぬのか。

新一は重い足取りで博士の家に戻った。

志保「遅かったじゃない。何かあったの？」

新一「子どもたちと博士が人質にされた。」

志保「え…。」

新一「要求に答えないとなくなかった。」

志保「要求は？」

新一「俺が…志保を殺さなければならぬ。」

志保は一瞬驚きの色を見せたが、すぐに静かに笑った。

志保「それなら早く殺しなさい。」

その言葉で新一は泣きながら銃口を志保のこめかみに当てた。そして――

バン

銃声が部屋の中に響き渡った。その音と同時に志保は崩れ落ちた。

志保「サヨ…ナラ……。」

志保はその言葉を発した後、帰らぬ人となった。

新一「志保おおおおお!!!」

その後、新一はずっと泣いていた。人質が解放されたと知っても、蘭が捕まったと知っても。新一はずっと泣いていた。

サヨナラ（後書き）

新一：可哀想。

愛しい君へ（前書き）

コナンから哀ちゃんへラブレターです（笑）
コナン君、ヘタレーーーーー！

愛しい君へ

灰原へ。

おめえ、俺の気持ち知らねえだろう？
って言っても俺も最近まで気づかなかったんだけどさ。

俺、前まで蘭が好きだと思いこんでた。でも違ったんだ。
俺は、灰原が好きだ。

俺、おめえのこと、守ってやつから。
だから、逃げんじゃねえぞ。

コナン「俺はバカか。」

コナンは書いてて馬鹿馬鹿しくなった。
最近、灰原がやたらキレイになってきて、置いていかれそうだ。それで、我慢が出来なくなってきた、告白という結論になったんだ。

やっぱり手紙より、直接言うか。

愛しい君へ（後書き）

うーーーーーわーーーーー短いっ（*
|*
）

k i s s (前書き)

授業中に適当に書いたやつです。
ちょっと見苦しいかも…。

k i s s

コナン「灰原…。」

哀「ごめんなさい。本当に…ごめんなさい…。」

彼女は泣いて謝ってくる。何度も何度も。別に、謝らなくていいのに。解毒剤なんて必要ないんだ。灰原の隣にさえいられば。

今日、灰原に呼び出され、解毒剤が出来ない体質になってしまったと告げられた。もちろん俺は少しショックを受けた。けど、少しだ。

コナン「いいよ、灰原。」

哀「ホントに…ごめんなさい…。」

コナン「なあ、俺、別に元に戻らなくてもいいんだよ。」

哀「えっ?」

灰原は涙で濡らした顔をあげた。その顔はとてもキレイだった。

コナン「俺は元に戻れないより、灰原が隣にいねえ方が辛えかな。」

哀「それってどういう…」

コナン「こういうことだよ。」

俺は彼女の唇に自分の唇を重ねた。灰原の顔はみるみる赤くなっていく。

コナン「俺はおめえが好きだ。」

哀「う……そ。」

コナン「本当だよ。」

哀「うそっ！そんなの気の迷いよ。だいたい、蘭さんはどうしたのよ？」

やっぱり、そう思うか。

コナン「俺は、蘭のこと好きだった。もう過去形だよ。」

哀「あんなに元に戻りたがってたのに……。――私が、私の存在が、貴方達二人を引き離してしまったのね……。」

悲しそうな瞳をする灰原。なんで……。何でそうネガティブに考えるんだよ。俺は……もう灰原しか考えられねえのに。

コナン「バーロー。おめえのせいじゃねえよ。」

哀「貴方はどこまでも優しいのね……。でも私、貴方のそういうところ、嫌いじゃ無いわよ？」

コナン「逆に好きだろ。」

哀「貴方は自惚れ屋なの？でも、そうかもね？私、貴方のこと、大好きだから。」

は……？

コナン「マジで……？」

哀「二回も言わないわよ。」

嬉しすぎて、俺は灰原を抱きしめた。

哀「えっ、ちょっと……！！」

声は抵抗しているが、満更でも無さそうだ。その後、どちらともな

く、二回目のキスをした。

k i s s (後書き)

誤字の指摘、お願いいたします／＼
／＼
／

切なさ（前書き）

哀ちゃんの思いです。

切なさ

お願いだから優しくしないで。

貴方の優しさが犯罪者の私には辛すぎるのよ。

どうして私を助けてくれるの？ 私なんかほっとけばいいのに。貴方が大切なのは蘭さんでしょう？

バカじゃないの？

どうせなら罵倒してよ。ひどいくらいに。

その方が私としてはよっぽど気が楽なのよ。

貴方の優しさは只の空回りなのよ。無駄なことなのよ。それがわからないの？

それなのに…どうして？ どうして私なんかに優しくするのよ。

貴方の優しいから私は江戸川君を好きになっちゃうのよ。

お願いだから…お願いだから優しくしないで。

切なさ（後書き）

遅くなってすみませんでした（ノ・・；）
誕生日でテンションあがってて（。ロ。）

やきもち

「志保お…ひ 私は暇じゃないんだけど。」

「腹へっ」「お腹空いたなら蘭さんの所に行きなさい。」

「志保が作っ」「言っとくけど、私は作らないわよ。」
「…」

只今、志保はすごく機嫌が悪い。何でだっけ？なんか悪いことしたか、俺…。

「何でそんなに機嫌悪いんだ？おめえ…。」

「自分で推理すれば？彼女より事件が大好きな名探偵さん？」

志保の言葉はどこか刺々しい。そりゃそうか…。デートほったらかしにして事件ばかり行ってたもんな…。

——ん？

俺は口角を上げて志保に聞いてみた。

「もしかしておめえ、事件にやきもちやいてんのか？」

「なっ…！ち、違うわよ…！！」

真っ赤になって反論する志保…凶星だな。俺はニヤリと笑って志保を抱きしめた。

「おめえ、かわいいな！」

「はあ？」

そのまま強く、志保を抱きしめ続けた。

puzzle

「はぁー。」

と、ため息を1つ。志保はやっぱり今夜もまた部屋を出てしまった。ケータイのワンセグだって何も笑えない。只つまらないことをしてるだけ。

窓から見える工藤君と蘭さんのキスシーン。

誰のせいでもない。別に優しくったあの人なんて、もういなくても平気。みたいな顔ですましてるけど、そんなわけない。あの二人のツーショットから目をそらしただけ。

街の中を歩いていくと、人とぶつかった。志保の荷物はすべて飛び出す。慌てて荷物を拾うとケータイの待ち受けには笑顔の二人がいる。

そのまま操作をするとお互いの名前が入ったメアド。

二人の中を繋ぐのはこれだけ。だから、忘れようと削除の操作をすると手が止まる。どうしても消せない。

哀の頃は、いつも肩肘をはって、強がって生きてた。

弱い自分をみられないように。彼への想いを心に並べても未完成なパズルのようで。どこか足りない。

当たり前のようにずっと傍にいた。志保としてはそれで十分。それだけでよかった。

思い出すだけで涙が出てくる。

きっと蘭さんはすべてのピースが揃ってる。

私には：足りない。私に足りないピースのたった1つを見つけない。

そうパズルね。

p u z z l e **(後書き)**

倉木麻衣さんの p u z z l e です／ (< _ >)
／

キヨリ―哀バージョン―

わからないでしょうね。工藤君には。

私が貴方を愛してるっていう事実を。

気づいてないでしょう？私がずっと貴方をみてること。

気づいてないでしょう？ずっと貴方の隣で笑っていたっていう想い。

この気持ちが伝えられたら…どんなにいいか。
でも許されないことなのよ。

犯罪者に幸せなんて――あつてはならない。

それに、貴方には蘭さんがいるでしょう？

だ

から…私はこの想いを封印するの。ううん、しなきゃならないのよ…。

だからきつと、このキヨリがちょうどいいのよ。

もう、これ以上なんて望まない。蘭さんと工藤君のために。

それに、私はこのキヨリでいたいから。そのままずっと………

キヨリー哀バージョンー（後書き）

誤字の指摘、お願いいたします／（＜―＞）／

キヨリーコナンバージョンー(前書き)

コナンバージョンです／(＜|＞)／

キヨリ―コナンバージョン―

わからねえだろ？灰原には。

俺がおめえを愛してるっていう真実を。

気づいてねえだろ？俺がおめえをずっとみてること。

気づいてねえだろ？おめえの隣で笑っていたっていう想い。

この気持ちが伝えられたら…。どんなにいいんだろうな？でも、ダメだ。

俺がこの気持ちを伝えたら灰原はきつと苦しむ。そんなのみていられねえ。

だからきつと、このキヨリがちょうどいいんだよ。

辛いけど、もう、これ以上は望まない。灰原のために。

それに、俺はこのキヨリでいたいから。

寝言

「志保お？ただいまっ」と。」

新一は何の躊躇もなく阿笠邸に上がりこんだ。リビングを覗くと、目当ての人はいた。

すうすうと規則正しい寝息をたてていた。

すっげえキレイな顔。ヤバイ、かわいい…。

新一は見惚れていた。

白い肌に長いまつげ。整った顔立ち。

「ん、」

起きるのかと思い、新一は後ずさった。志保は寝起きがかなり悪い。

しかし、その心配はなかった。

「工藤君…。」

「えっ？俺？」

「愛してる…。」

新一は一瞬驚いたが、すぐに笑顔になった。

「俺もだよ。」

小さく呟き、眠ってる志保のおでこにキスをした。

そのタイミングで志保が起き、薬の実験台にされたいらしい…。

隣の彼

隣の彼はいつも寝てる。何でかこっちを向きながら。

今は六時間目、数学。いつもは寝ている彼のことなんかほとんど無視。でもなんか今は…彼を見つめてしまう。

白い肌、長いまつげ。すごく整った顔立ちをしている。少しはねている髪も、なんだかかわいい。

あっという間に放課後になった。彼はまだ寝ている。教室は私と彼の二人だけになった。

「起きなさい、工藤君。放課後よ。」

揺さぶっても起きやしない。…ちょっと位、はめをはずしてもいいんじゃない？

少しずつ、彼の顔に顔を近づけていく。その瞬間、工藤君と目があった。

「ん、宮野？」

「！」

少し後ずさった。そして冷静になるように努めた。彼はそんな私に気づかず、ニヤリと笑った。

「おめえ、今俺にキスしようとしただろ？」

はめなんかはずさなければよかった。顔が熱い。いつものポーカ―フェイスはどこへやら。

「ま、いいや。これで遠慮なくていい。――俺も好きだよ。」

彼があまりにも真剣な目で見つめるから。少しずつ鼓動が高鳴っていく。

私が固まっていると彼に抱き締められた。もう、全身が熱い。でも、もう少しだけ、彼に身をゆだねてもいいかもね。

そのまま二人は抱き締めあっていた。

あの蒼い月光（前書き）

お久しぶりです／（＜―＞）／

月夜の悪戯の魔法をもとにした小説です。

新↓快志です。

あの蒼い月光

暗い暗い部屋の中、新一はふと、空を見上げた。思い出すのは、今日と同じ蒼い月光だったあの日。

組織を潰して俺は工藤新一に、灰原は宮野志保にそれぞれ戻った。その時にはもう、俺は宮野に恋をしていた。ずっと守りたいと思った。

その後、俺は学校に復帰して、宮野は転校してきた。はじめての高校はそれなりに楽しいみたいだ。

蘭はふった。復帰してからすぐに。宮野が好きだとも言った。すべてを話した。

蘭は笑って俺の恋を応援してくれた。やっぱり、蘭は優しい。

最高の幼なじみだと思った。

その直後、綺麗な月が出ている日に俺は宮野に告白した。

「ごめんなさい。灰原哀の頃は、ずっと好きだったわ。でも、今は他に好きな人がいるの。とっても優しく、温かい、頼れる人が。」

この返事は俺の胸をズタズタにした。コナンの頃からずっとあった
思いだったのに。伝えていれば、何かが変わった？

「もしかして…黒羽？」

「そう。来週には、二人で暮らすつもりよ。だから今日が最後にな
るかもね。——サヨナラ、工藤君。」

手をふった後ろ姿。あまりにも綺麗で。俺は動けなかった。

なによりも黒羽が羨ましかった。あの日、宮野を連れ去ったのだから。
ら。

その日から、宮野と会うことはなかった。もうかれこれ3ヶ月。

毎晩、宮野の夢を見る。もう一回あって、心から心から伝えたい。
愛してる愛してる届かぬ思い。絶対に伝えられない。伝わらない。

夢ならば夢ならば、宮野に会えるのに。想いを伝えられないけど。
会いたいという祈りは届かない。

宮野はいつも影に囚われていた。その闇を救ったのは黒羽だったんだ。それが俺だったなら。よかったのにな。

新月が闇に潜むように宮野の姿が見えない。

あんなにも近くにいたのに。

頭の中を占めるのは

どうしてだろう。最近灰原が気になる。

中学一年生になった俺らは、今日が入学式。横にセーラー服姿の灰原。

……………可愛い過ぎだろ。

前まではなんともなかったのに。

ただの目付きが悪い欠伸娘としか思ってたなかった。

でも、いつからだっけ？

灰原を守りたいと思ったのは。灰原の存在がこんなに大きくなっていたのは。灰原がいないと、こんなにも胸が空っぽになるのは。灰原に告白する男子にどうしようもなく嫉妬してしまうのは。

俺って灰原が好きなのか？

頭の中を占めるのは（後書き）

自分の気持ちに気づいたコナン君。

素直になれない

中学校からの帰り道。

哀は河川じきをぶらぶらと歩いていた。いつも一緒に帰っている人——コナンは今日は部活だ。

ボーッとしていると後ろから声をかけられた。

「あら。哀ちゃん。」

「蘭さん……。お久しぶりね。」

毛利蘭。去年、新出さん結婚した。相変わらず、キレイな人だった。

「コナン君と上手く行ってる？」

「私は江戸川君なんか好きじゃありません。」

「素直になりなよ、哀ちゃん。って、用事で急いでたの忘れてた！じゃあね。」

嵐のように去っていった。

————素直になんかなれないわよ。
どうせ私はひねくれものだから？

——でも、ちょっとからかい半分でないかもね。
やっぱり私は素直にならない。

素直になれない（後書き）

イミフデス。

信じていいの？

貴方は優しい。

どうしてそんなに優しいのかしら？ 私なんかのために。

こんな私でも守ってくれる。

でも時々、時々だけど、その優しさが信じられなくなるの。

裏切られるのか怖いの。

人の暖かさを知ってしまったから。

ねえ…、工藤君。私はその優しさを、信じていいのかしら？

貴方の優しさを同情じゃないって、信じていいのかしら？

貴方も私と同じ気持ちかも知れないって、信じていいのかしら？

――私は貴方を信じたいの。

ワタシハアナタヲシンジテイイノ？

何かが足りない

組織を潰して、俺は工藤新一に、灰原は宮野志保に戻った。

その1週間後、宮野は消えた。何の跡形もなく。

その日からだ。俺の生きる気力が一気に抜けたのが。

もう何もやる気力がない。

俺にとって宮野は相棒とか、運命共同体とかしか思っていなかった。

でも、宮野がいなくなってから気づいた。

俺は、宮野を好きなんだ。

すべてが、遅かった。気づくのが遅すぎた。

――――なあ、宮野。

俺の声が聞こえるのなら、この町に戻ってきてくれよ。

あの日から何か、いや、お前が足りないんだ。

私は、私らしく。

「なーんてね。」

貴方はこの言葉の意味をわかってる？

———分からないでしょうね。貴方、鈍感だから。

貴方は悪戯してるとしか思っていないでしょう？

———全然違うわよ。

これは只の照れ隠し。会ったこともなかったことにできるじゃない？

「貴方のこと、好きよ。」

「えっ？」

「なーんてね。」

ほら。私はひねくれてるからこうなるの？

違う。私は只、弱いだけだ。思いを伝えて、この関係が壊れるのが

怖いだけ。

でも、これは私らしいんじゃない？

私は、私らしく、ね。

灰原さえ

俺は知っている。

灰原が毎晩寝ないで、解毒剤を作っていること。

無理なんかしないでほしいのに、あいつは優しすぎるから自分を放っておく。

なあ、頼むから無理しないでくれよ。解毒剤なんかほんとは要らないんだ。

灰原さえ隣にいてくれれば。

お願いだから、無理しないでくれよ。俺が、お前を守るから。運命共同体としてじゃなく、永遠のパートナーとして、な。

――――灰原、もとに戻ったら、俺が告白してやっから、
首長くして待っとけよ？

恋って。

恋って、————つらい。

組織にいた頃は恋なんかしたことなかった。

————ううん、したくなかった。

今は彼に恋をしている。

叶ってはならない恋。120%、叶わない——。だって、彼には愛しの彼女がいるのよ？叶うはず、ないじゃない。

だからかしら、頭に変な方程式ができた。

恋愛Ⅱ辛くて叶わない——

あと、もうひとつ。

恋愛Ⅱ楽しい

ホントに、おかしい方程式。辛いと楽しいが一緒だなんて矛盾して
ると思わない。

——きっと私は一生、彼に恋をし続ける。

傷ついても、叶わない恋だと、わかっていても。

お願い

お願い、そばにいて。

そんなこと言えないけど、ホントに思ってるの。顔には絶対に出せない。

犯罪者が幸せを願うなんてありえないこと。だから言えない。いいえ、言っちゃダメなの。ゼツタイニ――――。

貴方は…蘭さんのことばかりでしょう？あの子のことばかり話すのだから。

その話を聞くのは結構つらいのよ？
胸が張り裂けそうな位に……。

まあ推理にしか興味のない貴方だから、気づいていないでしょうけど。

もし、もし貴方が一ミリでも私のことを気にしてくれてるのなら

——お願い、そばにいて。

特別なアイツ

会いたい。寂しい。

灰原が居ないとき、いつもそう思う。

あいつが隣に居るときが一番心地がいい。あいつが隣に居るときが一番自然体でいられる。あいつが隣に居るときが一番幸せ。

あいつが居ないとき、物足りない。あいつが居ないとき、無性に悲しくなる。あいつが居ないとき、幸せになんかなれない。

蘭と居るときには絶対になかった、この胸に渦巻く思い。

灰原は俺の特別だと思う。

灰原にとってもそうであってほしい。

特別は特別でも、同情とかじゃない。

――――俺は、灰原が好きだ。

渡さねえよ？

最近の灰原は、すごく綺麗だ。

高校に入学してからものすごく綺麗になっていって、俺は、アイツに追いつけない。

10年前の姿から彼女は十分変わった。

あの頃から伸ばしている髪の毛はさらさらで、緑色の瞳は透き通っていて、相変わらず飯食ってるのか？ってくらい痩せていて。

それがアイツの魅力を引き出していて。

びっくりする位に大人びているアイツは、当たり前だが男子にモテる。

この高校の男子の9割はおそらく灰原が好きだろう。

しかも灰原は無自覚無防備。

だから簡単にどんなやつでも笑顔を向ける。

それに俺は確実に嫉妬している。

そんなやつらに灰原は渡さねえ。
俺が強くなって、灰原を守るんだ。

神様

大好き……いいえ、愛してる。

色恋沙汰に疎い工藤君は私の思いを多分知らない。

彼は蘭さんと事件しか頭がない。彼の脳内に私は居ない。

こんなにも切ない思いしたことない。

貴方のせいよ？ 工藤君。

————— 貴方を、犯罪者の私が、愛してしまった。

この恋は、叶わない。違う、叶ってはならない。私の存在自体がいてはならないもののに。そんな人が恋だなんて。

叶ってはならないのは当たり前。

神様、この恋は、ホントに叶ってはないのですか――？

初恋をありがとう

蘭さんと工藤君が付き合い始めたとき、思わず涙がこぼれた。おかしいわよね、望んでいたことなのに。でも、ずっと好きだったもの、哀の頃から。

その後、彼を避けていた。自分が傷つくのが怖いから。嫌だから。

…なんて弱くなったんだろう。

でも、彼が避けているのを気づいてないわけもなく、ずかずかと家に入ってきた。

「おい宮野！」

「何よ、勝手に人の家に入らないでくれる？」

工藤君の声には少なからず怒りがこもっている。：当たり前よね。一週間、避けまくってたもの。

向かいのソファアにどかっと座り、いきなり核心をついてきた。

「おめえ、俺のこと避けてただろ？」

「そうだけど？」

「そうだけどっておめえなあ、」

「貴方にとったら私が近くにいても何の利益もないでしょう？ 解毒剤はもう完成したんだから。それに、貴方は蘭さんと付き合ってるんでしょ？ じゃあ私のことなんて、ほっとけばいいじゃない。」

「利益のあるなしで動いてねーよ！」

工藤君が怒鳴った。少しの沈黙が流れる。先に口を開いたのは工藤君だった。

「なあ、なんでだよ……。何で俺のこと避けてるんだよ。」

捨てられた子犬のような悲しい瞳で私に問いかける。その瞳があまりにも悲しげで。彼にとって、私はどうでもいいはずなのに。

「————私は貴方が好きだから。ずっと、哀の頃から。」

「！」

心底驚いてる。それもそうよね、ずっと隠してたもの。

「俺は、蘭が好きだ。」

その言葉は、当たり前。彼は蘭さんがずっと好きだったものね？私が見つけていた頃からずっと。

だから、私は到底叶わない。

ふと目頭が熱くなって、涙が出てきそうになる。そんなの彼に気づかれてはならない。私は逃げるように立ち上がって、地下室へ行こうと歩き出す。

「けど、」

彼が言葉を発する。と同時に私の足が止まる。

「江戸川コナンのときは、灰原哀が好きだったぜ。」

涙が流れる。何で、今言うのよ。

「その言葉は、哀の頃に言ってほしかったわ。」

「でも蘭は泣かせたくないから。ゴメン。」

「別に知ってたから大丈夫よ。」

「大丈夫じゃない。」

彼は即答するからびっくりした。

「おめえが大丈夫っていうときは、大丈夫じゃない。」

「蘭さんと幸せにね。」

それだけ呟いて私は地下室へ走った。

サヨナラ、初恋をありがとう。工藤君。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7302y/>

二人の短編集

2012年1月14日19時56分発行